

心的ファイルとメタ表示

成 瀬 翔¹

はじめに

近年、言語学、認知科学などの分野において、「メタ表示² (meta-representation)」と呼ばれる概念が注目を浴びている。言語学における関連性理論の提唱者として知られるディアドリ・ウィルソンは、メタ表示を次のように定義している。

メタ表示は、表示の表示 (a representation of a representation) である。すなわち、高次表示 (higher-order representation) は、低次表示 (lower-order representation) をそのうちに組み込むのである。(Wilson 2000, p. 411)

このようなメタ表示を人間が使いこなす能力は、おおよそ「人間のことばに特有のことばをことばで表す能力」(東森 2015, p. 195) と説明することができる。しかし、メタ表示は言葉に限定されるわけではない。このようなメタ表示概念が注目を浴びるようになった理由のひとつは、認知心理学や関連諸分野の研究の成果から、ある主体が他の主体の意図や心を理解する能力が人間のコミュニケーションの原理として想定されるようになったことである。つまり、なんらかの応答をする際に、ある主体が「私は彼がしかじかと思っていると思う」のように他の主体の意図や心を理解しなければ、コミュニケーションは成立しないと考えられている。このような主体の能力もまた、低次表示を組み込んだ高次表示を操る能力、すなわちメタ表示能力である。

このような認知心理学・言語学の動向を受けて、哲学においてもメタ表示能力に着目する研究が進められている。その中でもフランスの言語哲学者フランソワ・レカナティの研究は、人間が「ペガサス」や「サンタクローズ」などの現実の世界に対応する存在者が見いだせない名前(空名)の使用を、メタ表示能力によって説明する極めて興味深いものである。近年、レカナティは、心的ファイル・フレームワーク (mental file-framework) という独自の理論によって、人間の世界内の存在者との認知的接触の場面までさかのぼり、言語使用の全体像を描き出

¹ 名古屋大学大学院文学研究科博士研究員、e-mail: sho.naruse1987@gmail.com.

² 'meta-representation' という用語は、心理学においては「メタ表象」と訳されることが多い。本論文では、言語学の用法を踏襲し、基本的には「メタ表示」と訳すが、心理学などの文脈では「メタ表象」と訳し分ける。

そうとする野心的な理論を提唱している (Recanati 2012)。その中で、話者の言語の志向的使用 (intentional use) と聞き手の理解を説明する鍵となるのが、メタ表示に他ならない。レカナティの描像では、人間が虚構や物語、神話を語るときに現れる「ペガサス」や「サンタクロース」などの名前を使用する場面では、メタ表示能力が使用されており、その能力によって、人間はそれらを理解するのである。このようなレカナティの戦略は、空名もなんらかの指示対象をもつとみなし、現実の指示対象をもつ真正な名前と類比的に空名を考える理論³とは決定的に異なる特異な理論といえる。本論文はレカナティの理論を検討し、その特徴と射程を明らかにすることを旨とする。

本論文は、まず第1節では、予備的考察としてメタ表示概念をめぐる諸議論を概観する。そして、第2節以降ではレカナティの議論に移り、レカナティの提示する心的ファイル・フレームワークのアウトラインを素描する。そして第3節では、主体のメタ表示能力を説明する指標付きファイルがどのような問題意識から彼のフレームワークに組み込まれ、作用しているかを検討する。最後にレカナティの議論を批判的に検討し、その問題点を指摘する。本論文の結論を先取りすれば、レカナティがメタ表示概念と指標付きファイルを導入するのは、言語使用者が現実世界に指示対象が見いだせない名前を理解する場면을説明する必要性に迫られたからである。しかし、レカナティの目論見に反して、メタ表示機能を担う指標付きファイルを導入するだけでは、空名の使用を説明しつくすことはできない。本論文の結論では、なぜメタ表示機能だけによって空名の使用を説明することができないのか論じられる。

1 予備的考察——メタ表示とはなにか？

本節では予備的考察として、メタ表示能力についての認知心理学や言語学などの研究を概観する。

ウィルソンと共に関連性理論を研究するスベルベルは、人間のメタ表示を使用する能力と、コウモリが超音波で場所を特定する能力 (反響定位) を類比的に語る。

コウモリにとって反響定位を使用する能力が固有のものであるように、人間にとってメタ表示を使用する能力は固有のものである。(Sperber 2000, p. 117)

このようなメタ表示能力は、「心の理論 (theory of mind)」にかかわる研究分野において特に注目を浴びている。松井智子は認知心理学や発達心理学などにおける研究の広がりについて、次の3点を指摘している (Matsui 2010, pp. 268-269)。第1には、発達心理学ではすでに古典

³ この立場には、マイノン主義、可能世界説、キャラクター指示説などが含まれる。Priest (2005), Zalta (1983) を参照。

的研究となった、幼児の延滞模倣 (deferred imitation) や鏡像認知 (mirror self-recognition) に関するメルツォフやペルナーの研究をもとに、これらの事例をメタ表象能力の発達過程によって説明する研究である。第2に、自己意識ないし自身の心的状態についての反省に対する認知的メカニズムと、他者の意図や心的状態を理解するメカニズムの研究である。この研究は、ヒト以外の社会的生活を営む霊長類動物の生態学的研究や、霊長類動物からヒトにいたる心の理論の進化の過程にかかわる研究にも取り入れられている。第3に、自閉症の症例の研究である。自閉症患者は他者の心を理解が困難であるが、同時に自己認識の欠損も示すことが知られている。これらの症状は、心の理論のモジュールを欠く発達障害であるという仮説にもとづき、自閉症患者の心理を説明しようとする研究が行われている。

これらの研究と並行し、言語学ではメタ表示能力を人間のコミュニケーションにとって本質的な能力であると考え、その研究が行われている (Matsui 2010, p. 269)。本論文の冒頭で引用したウィルソンは、メタ表示の「表示」を以下のように3つに区分する (Wilson 2000, p. 414)。

- A) 心的表示 (mental representation)
- B) 公的表示 (public representation)
- C) 抽象的表示 (abstract representation)

心的表示の典型例は、ある人間が考えたこと (思想) であり、他方、公的表示の典型例は、発話である。そして、抽象的表示のカテゴリーには、文や命題といったものが含まれる。ウィルソンは、高次表示と提示表示の関係を次のように説明する。

高次表示は、一般的にある発話や思想である。低次表示の3つの主要なタイプは、公的表示、心的表示、および抽象的表示である (…)。(*ibid.*)

メタ表示はこれらの3つの表示の区分が組み合わさることによって形成される。松井は次のような例を挙げる (Matsui 2010, p. 268)。

(i) 心的表示の心的表示

メアリーは、ジョンはガソリンの価格がすぐ上がると思っていると思っている。
(Mary believes that John believes that the price of petrol will go up soon.)

(ii) 公的表示の公的表示

メアリーは、ジョンはガソリンの価格がすぐ上がると言ったと言った。

(Mary said that John said that the price of petrol will go up soon.)

(iii) 公的表示の心的表示

ジョンは、メアリーはガソリンの価格がすぐに上がると思ったと思っている。

(John believes that Mary said that the price of petrol will go up soon.)

(iv) 心的表示の公的表示

ジョンは、メアリーはガソリンの価格がすぐに上がると思っていると言った。

(John said that Mary believes that the price of petrol will go up soon.)

(v) 抽象的表示の心的表示

ジョンは、メアリーは 'boring' と 'tedious' が同義語であると思っていると思っている。

(John said that Mary believes that 'boring' and 'tedious' are synonymous.)

(vi) 抽象的表示の公的表示

ジョンは、メアリーは 'boring' と 'tedious' が同義語であると信じていると言った。

(John said that Mary believes that 'boring' and 'tedious' are synonymous.)

ここで注意が必要なのは、なんらかの表示が低次表示として組み込まれる高次の抽象的表示は存在しないということである⁴。メタ表示は人間の心的能力の産物であり、それを離れたところには存在しない。それゆえに、メタ表示能力の解明を通じて、人間の認知的活動を解き明かすことが期待されている。

2 レカナティの心的ファイル・フレームワーク

本節で検討するレカナティの「心的ファイル・フレームワーク (mental file-framework)」は、ある意味において、言語哲学の伝統に即した理論であるが、その一方で近年の言語学・認知科学などの成果も取り入れた意欲的なものである。レカナティの提唱する心的ファイルとほぼ同様の概念が意味論においてはファイル変化意味論や談話表示理論において用いられており、心の哲学においてもミリカンが個体概念の内容をファイルとして捉えている (Millikan 1997, 2000)。レカナティによれば、心的ファイルという概念は、特定の対象に関する情報をひ

⁴ 東森(編)(2015), p. 2は Matsui (2010) から 'An abstract representation (...) of a mental representation and/ or a public representation' と誤って引用しているが、正しくは、'A mental representation and/ or a public representation of an abstract representation (...)' である。

とまとめしておくために用いられるものである。そして、心的ファイル・フレームワークでは、話者の固有名の理解は、その音声によってしるし付けられたファイルと話し手がそこに収めている情報からなると説明される。ただし、心的ファイルは単称名辞のように対象を直接的に指示するのではなく、そのファイルを制作する際に主体と対象の間の認知的関係によって個別化されたフレーズの「意義 (Sinn)」に相当する役割を果たす。

しかし、ファイル概念に基づいた理論は決して目新しいものではない。言語哲学ではストローソン、グライスが先駆的な研究を行っており、ガレス・エヴァンズやジョン・ペリーの議論から心的ファイル・フレームワークは強い影響を受けていることをレカナティ自身が認めている⁵。しかし、レカナティの理論のもっとも顕著な特徴は、人間のメタ表示能力を説明するために、「指標付きファイル (indexed file)」をフレームワークに組み込む点にある。レカナティが指標付きファイルを導入する眼目は、「ペガサス」や「サンタクロース」のような空名の志向的使用を説明することにある。以下では、まず心的ファイル・フレームワークを概観し、それから指標付きファイルによってどのようにメタ表示能力が説明されるのか、そして空名の志向的使用の説明に成功しているのかどうかを検討する。

2.1 心的ファイル・フレームワーク

レカナティの主張する心的ファイルとは、獲得した特定の対象についての様々な情報を蓄積する主体の心的機能をファイルというメタファーによって説明した概念である。心的ファイルは、ある認知環境における特定の対象についての様々な認知関係に基づくが、この際に異なるタイプの関係は異なるタイプのファイルと対応する。そして、主体がファイルを制作するためには、特定の対象との「見知り関係 (acquaintance relation)」を必要とする。見知り関係の典型例は、対象についての知覚的關係である。しかし、ファイルを制作するためには、必ずしも主体は対象との知覚関係をもつ必要はないとレカナティは指摘する。デイヴィッド・ルイスが「認識的疎通 (epistemic rapport) 関係」のアナロジーによって説明した、一般化された見知り関係、すなわち会話や伝達においてわれわれに言及された対象に対する「共同体を媒介した身元保証関係 (community-mediated testimonial relations)」においてもファイルを獲得することができる (Lewis 1999, pp. 380-381)。つまり、言語的共同体によって継承された因果的連鎖に主体が参与することによって、特定の対象についての関係をもつことが可能となるのである。レカナティは、この一般化された見知り関係を「認識的に有益な関係 (epistemically rewarding relation)」(ER 関係) と称し、ファイル獲得のための条件とみなす (Recanati 2012, p. 20)。

ER 関係によって獲得された心的ファイルは、主体の対象との関係により、情報を蓄積する

⁵ さらに、レカナティは、フッサールの「ノエマ的意味」も心的ファイルと類似した働きをするを指摘する。(cf. Beyer 2008, 2013, 成瀬 2015)

機能を果たす。レカナティは心的ファイルの機能と文における単称名辞の機能とのアナロジーを強調し、心的ファイルが思想における単称名辞の機能を果たすと主張する。つまり、当該のファイルは、思想の構成要素であると考えられる。このような心的ファイルの果たす機能は、固有名のフレーゲの意義の果たす機能と本質的に同一のものであると言えるだろう。しかし、レカナティとフレーゲの相違は、意義を認知関係によって個別化された「ファイル化システム (failing system)」と呼ばれる心的作用によって説明する点にある。このようなレカナティの立場は、「心理化されたフレーゲ主義 (psychologized Fregean)」と呼びうるものだろう (Recanati 2012, pp. 38-41)。

このような心的ファイルがどのように機能するかを検討してみよう。心的ファイルを導入する利点のひとつとして、「フレーゲのパズル」と呼ばれる、同一性言明の認識価値 (Erkenntniswert) あるいは認知的重要性 (cognitive significance) を説明する課題を克服することができる点あげられる。周知のように、フレーゲはこの問題に対処するために、意義という意味論的要素にうったえた (Frege 1982, pp. 26-27)。フレーゲの考えでは、「キケロはキケロである」という文は、トリヴィアルな同一性を表現しているが、「キケロはタリーである」という文は、新しい情報が含まれている。たとえば、タロウは「キケロは『トゥスクルム荘対談集』の著者である」ということを信じているが、キケロのミドルネームの英語読みが「タリー」であるとは知らず、別人だと信じているとしよう。タロウは「キケロは『トゥスクルム荘対談集』の著者である」という言明を正しいと認めるが、「タリーは『トゥスクルム荘対談集』の著者である」という言明は正しいとは認めない。つまり、タロウは「キケロ≠タリー」と信じているため、「キケロはタリーである」という同一性言明を認めない。しかし、「キケロはキケロである」や「タリーはタリーである」のような $A = A$ 形式というトリヴィアルな同一性言明は (論理的真理として) 認める⁶。しかし、その後、キケロのミドルネームの英語読みが「タリー」であると知った場合、タロウは「キケロはタリーである」という同一性言明を認めるようになる。つまり、「キケロはタリーである」のような $A = B$ 形式の同一性言明は、 $A = A$ 形式の同一性言明とは異なる認知的重要性をもつのである。

フレーゲは名前「キケロ」と「タリー」に結び付けられた意義 (Sinn) が異なると説明することによって、そのような同一性言明の情報付与性を説明する。つまり、「キケロはタリーである」という同一性言明は、ふたつの名前が指し示す個体間の同一性だけを表現するのではなく、同一の個体でありながら、異なるふたつの意義をもつということも表現している。だからこそ、 $A = B$ 形式の同一性言明で、われわれは新しい情報を得ることができる。

6 「イチローはやっぱりイチローだ」のような同一性言明 (トートロジー) は、単なる同一性を表現する以外に、発話の文脈に応じて多様な語用論的意味もつ。たとえば、イチローが試合途中でエラーをしたが、それを挽回するファインプレーをした場面で、話者が「イチローはやっぱりイチローだ」と発話した場合、話者は「イチローはやっぱり素晴らしい選手だ」という内容を述べることを意図している。このような同一性言明の語用論的意味については、酒井 (2012) が詳細に論じている。

しかし、これらの名前に結び付くフレーゲ的意義に対しては、多くの批判がなされてきた。以下の一節において、ファイルは意義に対する批判を端的に表明する。

[ふたつの名前に結び付けられた意義の間の] 相違があるはずだという考えには、正当な理論的根拠があるように見える。だが、特定の場合においてその相違が何であるかについて述べるのは困難であるように思われる。というのも、Kripke (1980) が指摘したように、「キケロ」と「タリー」のような、ふたつの名前に同じ信念ないし情報を結び付けることは、話者あるいは話者たちに対して可能であるように思われる。そして情報あるいは信念が同じであれば、どのように意義は異なることができるのか? (Fine 2007, p. 35)

レカナティの心的ファイル理論はこのような批判に対して、次のように回答することによってフレーゲのアイデアを擁護することができる。「キケロ」と「タリー」に結び付けられたフレーゲ的意義とは、主体の心の中のキケロ・ファイルとタリー・ファイルに他ならない。このケースでは、タロウの心の中には以下の2種類のファイルがある。

〈〈キケロ〉, 〈タリー〉〉

確かに、キケロ・ファイルとタリー・ファイルの中の情報は、たとえば「『トゥスクルム荘対談集』の著者」のように同一であるかもしれないが、それは意義つまり心的ファイルが同一であるということの意味しない。心的ファイルのタイプは、それらを獲得した際の情報経路に対応し、複数のファイルが完全に同一の情報を含むとしても、それらの獲得の経路が異なれば、異なるファイルとみなすことができる。そして、主体は「キケロ=タリー」というさらなる情報を得ることにより、キケロ・ファイルとタリー・ファイルをリンクさせることによって、情報の統合が可能となる。

〈〈キケロ〉^{リンク}—〈タリー〉〉

このリンク化のオペレーションにより、情報は一方のファイルから他方のファイルへ自由にフローすることが可能になると心的ファイル理論は説明する (Recanati 2012, pp. 42-43)。

ここで重要なのは、レカナティはフレーゲ的意義ないし「提示の様態 (mode of presentation)」に記述的意義と、非記述的意義というふたつのアスペクトを認めることである。この区別は、新フレーゲ主義 (特にエヴァンズ) の議論によって知られているが、彼らによれば、フレーゲの意義は、記述によって汲みつくされるのではなく、知覚情報を含む様々な非記述的アスペクトをもつ (Evans 1982, pp. 132-136)。したがって、フレーゲ的意義が記述

的であるというクリプキの主張 (Kripke 1980) に対し、新フレーゲ主義者の見解を踏まえれば、見知りに対応する非記述的アスペクトないし提示の様態があると主張し、フレーゲを擁護することができるのである。レカナティはこれらの議論を踏まえ、非記述的意義こそが心的ファイルであると主張する (Recanati 2012, p. 11)。

ファイルが情報 (あるいは誤情報) を含むとしても、意義の役割を果たすものはファイルの中の情報ではなく、ファイルそれ自体であると注意しなければならない。一方では「キケロ」と結びづけられ、他方では「タリー」と結び付けられたふたつの異なるファイルがあるならば、たとえふたつのファイルの中の情報が同じであったとしても⁷、ふたつの異なる意義がある。この見解では、同一性言明内のふたつの名前ないし表現が異なる意義をもつと述べることは、それらがふたつの異なるファイルと結び付けられていると述べることである。同一性が発見された場合、ファイルはリンクされ、その結果、その情報はそれらの間で自由にフローすることが可能となる (Recanati 2012, p. 43)。

3 心的ファイルと空名の志向的使用

これまでの議論で確認したように、心的ファイルの役割は、主体が対象に関する ER 関係を通じて得た情報を蓄積することである。ここで注意が必要なのは、ER 関係の典型例は知覚的な見知りであるが、主体は実際の見知りがなくてもファイルを作成することができるということである。その典型的理由は、特定の対象に対する現段階での見知りがなくても、将来の見知りを期待し、心的ファイル内に情報を蓄積することができるためである。たとえば、「切り裂きジャック (Jack the Ripper)」という名前は、1888年にロンドンでの連続殺人事件を起こした人物を指示するために導入された名前であるが、われわれはその指示対象について実際の見知りを持たないため、「1888年にロンドンでの連続殺人事件を起こした人物」という記述によってしか知ることはできない (Recanati 2012, p. 43)。しかし、そのような名前の指示対象が記述によってしか知ることができないとしても、主体がその対象を将来的に見知ると予想する場合、その対象についての情報を蓄積するための心的ファイルを必要とする。したがって、レカナティは記述によらなければ知ることができない名前の指示対象も、そのような場合には心的ファイルを展開することが可能であると主張する (Recanati 2012, p. 164)。

さらに、レカナティは実際の見知りがなくとも、期待される見知りすら、心的ファイルを展開するためには必ずしも必要ではないと主張する。たとえば、想像された見知りは、

7 たとえば、ある主体が『トゥスクルム荘対談集』しか読んだことがなく、全く他の情報を知らない場合のように、「キケロ」と「タリー」に『トゥスクルム荘対談集』の著者 (the author of *Tusculanae disputationes*) という同一の確定記述を結び付けている場合はもとより、より曖昧に「有名なローマの弁論家 (a famous Roman orator)」という不定記述を結び付けている場合も含む。

期待された見知りのようにファイルを展開し、使用することを正当化する⁸。そのような仕方では名前を使用する場合、通常の名前の機能とは区別される寄生的機能があるとレカナティは指摘する。見知りが無い対象についての心的ファイルを展開する典型的な理由は、情報に対する期待である。しかし、そのような期待が無い場合ですら、心的ファイルを通じて対象について思考することができるという主張はレカナティは主張する (Recanati 2012, p. 168)。

たとえば、天文学者ルヴェリエが予測したふたつの惑星、すなわち予測以後に実際に発見した海王星と、実際には存在しなかった惑星バルカンのケースを考えてみよう。海王星とバルカンの両方のケースにおいて、ルヴェリエはしかるべき理由によってそれらの存在を予測し、海王星ファイルとバルカン・ファイルというふたつの心的ファイルを作成した。しかし、ルヴェリエの予測は海王星のケースでは正しかったが、バルカンのケースではそのような惑星が実際には存在しないために誤りであった。したがって、ルヴェリエが「惑星バルカンの発見によって有名になるだろう」と考えたとき、ルヴェリエの思想が真であるようなしかるべき対象 x がいないため、その思想が表現されることに失敗するのである (Recanati 2012, p. 170)。

3.1 空名の志向的使用と指標付きファイル

ルヴェリエのバルカンについての思想は、表現に失敗した思想の典型例である。この見解は、ルヴェリエが「バルカンの発見によって有名になるだろう」と考えた場合に、「バルカン」が空名であるという理由によって、ルヴェリエが単称的内容を表現することに失敗したということの意味する。しかし、空名を発話することが真理評価可能な内容を表現することを妨げないケースがある。以下の例を検討しよう。

- (1) ルヴェリエはバルカンの発見によって有名になるだろうと考えた。

(Leverrier thought 'The discovery of Vulcan will make me famous.')

ルヴェリエが実際にそのように考え、かつある主体が(1)を発話する場合、その主体は真なることを述べている。レカナティはこのような信念帰属を「疑似単称信念 (pseudo-singular belief)」と呼ぶ⁹ (Recanati 1998, p. 557, 2000, p. 226)。この問題は、発話の従属節に含まれる

8 ジェションは「子供の想像上の友達」という例を挙げる (Jeshion 2010, p. 136)。

9 レカナティは次のように疑似単称信念を説明する。

疑似単称信念を考慮することは、そのひとの信念ボックス (belief box) の中でトークン化 (tokening) [表現] された単称心的文 (singular mental sentence) をもつことであるが、それはいかなる命題も表現することに失敗する。(Recanati 2012, p. 177)

レカナティの説明によると、もしある主体が「私の友人の子どもは今晚サンタクロースが来ると信じる」と発話するならば、その主体は友人の子どもに疑似単称信念を帰属するために、空名「サンタクロース」を志向的に使用している。

「バルカン」が指示対象をもたないため、完全な思想を表現しないにもかかわらず、われわれは(1)の真偽を問うことができるということにある。われわれは、バルカンが存在しないことを知っているが、それでもなお、ルヴェリエがバルカンについてどのように考えたのかを語ることができる。したがって、以下のようなバルカンについての存在否定文 (negative existentials) と関連して同様の方針によって解決されなければならない。

(2) バルカンは存在しない。(Vulcan does not exist.)

(2)の場合、空名が発話されたとしても、そのような言明はやはり真なることを述べている。そのような文脈における空名の機能を明らかにするために、レカナティは心的ファイルの派生機能 (derived function) のアイディアにうったえる (Recanati 2010, pp. 177-181)。

心的ファイルの通常の機能は、主体が世界の中の対象の情報を格納する役目を果たす。しかし、心的ファイルには通常のファイルから派生したメタ表示機能をもつ派生的ファイルが存在するとレカナティは主張する。この派生的ファイルは、ある主体がどのように他の主体が世界の中の対象について思考するのかを表示する役割を果たす。これに加えて、ファイルのメタ表示機能は、否定存在文と疑似単称態度帰属によって例示された、空名の志向的使用を説明することができる。このようなファイルのメタ表示的使用を説明するために、レカナティは「指標付きファイル」の概念にうったえる。指標付きファイルの機能を検討するために、サンタクローズの存在を信じていないジョンと、サンタクローズが存在すると信じているマイケルを例に取ろう。

指標付きファイルは、主体の心の中で、対象についての別の主体のファイルにかかわる。われわれの例では、ジョンがもつ指標付きファイルは、マイケルがもつサンタクローズ・ファイルに関連する。指標付きファイルは関連する対象のファイルと指標から構成され、指標は指標付きファイルを所有する主体自身にかかわる場合と、主体がシミュレートする別の主体に関わる場合のふたつの可能性がある。指標がファイルを所有する主体自身にかかわるのは、自分自身が何を考えているのかを考える場合である。ジョンが「ほくは、サンタクローズは赤い服を着ていると考えている」と述べたとしよう。このとき、ジョンの所有するファイルは、次のようになる。

〈〈サンタクローズ, ジョン〉〉

ジョンは、自分自身に指標付ける指標付きファイルを所有することによって、ファイルの中に格納された情報が正しいかどうかを検討したり、反省したりすることができる。

ジョンとマイケルのケースでは、ジョンの指標付きファイル〈サンタクローズ, マイケル〉

は、マイケルがサンタクローズについて考える場合に、マイケルが使用すると推定上考えられるサンタクローズ・ファイルを示す。したがって、ジョンの心の中には、ファイルのふたつのタイプがある。一方はジョンが自身の環境の中の対象について思考するために使用する通常のサンタクローズ・ファイルである。もう一方は、ジョンが他の主体（たとえばマイケル）がどのように彼らの環境における対象（サンタクローズ）について思考するのかを表示するために、代理的に（vicariously）使用する指標付きファイルである¹⁰。したがって、このケースではジョンとマイケルは次のファイルをもつ。

ジョン <<サンタクローズ>, <サンタクローズ, マイケル>>
マイケル <サンタクローズ>

主体の心の中のファイルのふたつのタイプの存在（通常ファイルと指標付きファイル）およびファイルの間で作動するリンク化のメカニズムが与えられれば、所与の指標付きファイルに対するふたつの可能性がある。すなわち、指標付きファイルが通常ファイルとリンクされるケースとリンクされないケースである。たとえば、指標付きファイルと通常ファイルがリンクされるケースは、他の主体の信念を訂正しようとする場合である。ジョンがマイケルに「本当は、サンタクローズは存在しないんだよ」と言ったとしよう。このとき、ジョンはふたつのファイルを所有している。

<<サンタクローズ>, <サンタクローズ, マイケル>>

<サンタクローズ> ファイルは、ジョンのサンタクローズについての情報を格納する通常ファイルであり、<サンタクローズ, マイケル> は、マイケルに指標付られたファイルである。ジョンはサンタクローズの存在を信じていないため、通常ファイル <サンタクローズ> にはサンタクローズの存在を否定する情報が格納されている。ジョンがマイケルに「本当は、サンタクローズは存在しないんだよ」と伝えるとき、ジョンの通常ファイルと指標付きファイルは以

¹⁰ レカナティによれば、指標付きファイルは再帰的に構成される。つまり、指標付きファイルの構成ファイルは、それ自身が指標ファイルの場合がある。したがって、 S_1 がある存在者の S_3 の考える仕方の S_2 の考える仕方について考える場合には、 S_1 は指標付きファイル<< f, S_3 >, S_2 >を使用する（Recanati 2012, p. 183）。

たとえば、タロウが次のことを考えているとしよう。友人のジロウは、娘のハナコがまだサンタクローズを信じているかどうかを考えている。つまり、タロウが考えていることは、ジロウがハナコはサンタクローズについてどう考えているのかを考えていることである。このとき、タロウの心の中には次のような指標付きファイルがある。

<<サンタクローズ, ハナコ>, ジロウ>

このように再帰的に構成された指標付きファイルによって、複雑なメタ表示（このケースでは、より正確にはメタ・メタ表示）を説明することができる。

下のようにリンクされる。

〈〈サンタクローズ〉^{リンク}—〈サンタクローズ, マイケル〉〉

このリンク化によって、ジョンの通常ファイルに格納されている情報が指標付きファイルにフローし、サンタクローズの存在を否定する情報をマイケルに伝えることができる。

指標付きファイルは、他の主体がどのようにある存在者について思考するのかを表示するために機能する。そして、通常ファイルは、ある存在者を指示し、その存在者について思考する仕方と対応する。この通常ファイルがリンクされないケースでは、問題の存在者に対する主体の唯一の接近方法は、他の主体のファイル化システムによらなければならない。たとえば、ジョンはサンタクローズの存在を信じないにもかかわらず、マイケルがもつファイルのシステムを使用することによって、マイケルはサンタクローズがやってくると信じていると考え、マイケルが考えたことを理解することができる。この場合、ジョンは、「サンタクローズ」という空名が指示対象をもつと前提して、指示しているのではない。このため、ジョンは、サンタクローズについての真正な単称思想を表現するのではなく、代理的単称思想（代理者（proxy）による単称思想）を表現しているにすぎない。この代理的単称思想は、たとえば「マイケルは今晚サンタクローズが来ると信じている」のような、三人称の思想に等しい。このような思想は、指標付きファイルの指示対象の制限がない（free-wheeling）あるいは無負荷な（unloaded）使用によって表現される（Recanati 2012, pp. 184-185）¹¹。

このように、レカナティは空名の志向的使用を指標付きファイルによって説明する。ある主体が空名を使用する場合、その名前はいかなる対象も指示せず、主体はあたかも指示する対象が存在するかのように、指示するふり（pretend reference）を行うか、あるいは他の主体をシミュレートする指示（simulated reference）を行う。

したがって、レカナティは指示対象を担わない指標付きファイルと結び付けられた単称名辞を含む発話を解釈するふたつのオプションを提示し、いずれかのオプションによって説明が可

11 指標付きファイルは、主体の心の中の通常ファイルと結び付けられる場合もある。そのようなケースでは、主体は対象について思考するふたつの仕方がある。つまり、主体自身の通常ファイルについて思考する仕方と他の主体のファイルに指標付られたファイルを思考する間接的仕方である。主体が対象について思考するために指標付きファイルを使用するならば、その使用は、制限のない使用とは対照的に、指示対象を伴う負荷的使用であり、存在仮定をとまなう。たとえ主体が対象についてのある他の主体のファイルを通じてそれを指示するとしても、彼はそれについての通常ファイルを彼自身もつので、その対象は存在するとみなす。このように、単称思想は真正に表現される。次のような例を考えてみよう。S₁は明け方の空に輝くヘスベラスと宵の空に輝くフォスフォラスが別個の星だと考えていたが、それらの星はどちらも金星であることを知ったと仮定しよう。この場合、S₁はふたつの代理的ファイルで以前の彼自身が保持したヘスベラス・ファイルとフォスフォラス・ファイルに対して指標付ける。それらの両方のファイルは現在では金星ファイルにリンクされ、したがって存在論的コミットメントをとまなう。また、S₂がS₁の信念変化を考える場合、S₂はS₁の各ファイルに指標付けられた指標付きファイルを通じて間接的に思考する。（Recanati 2012, p. 204）

能であるとみなす。第一のオプションは、空名を含む発話は真正な思想を表現せず、フレーゲが指摘したように「見かけ上の思想 (Scheingedanken)」しか表現しないとみなす解釈である (Frege 1897, p. 141)。このオプションに従えば、ジョンがマイケルに「今晚サンタクロースが来るね」と述べる場合、ジョンは真正な単称思想を表現せずに、サンタクロースを指示するふりをし、マイケルに対して何かを述定するふりをする。そして、サンタクロースが今晚やってくるかと信じているマイケルの信念をジョンが模倣し、マイケルに「今晚サンタクロースが来るね」と伝えるならば、同様にふりを行っているのである。ここで「サンタクロース」と結び付けられたファイルは、サンタクロースに関する信念の保有者に対して指標付けられ、指示対象を担わない無負荷なファイルであるため、その言語行為全体はふりの形式としてみなされなければならない (Recanati 2012, p. 204)。

他方、第二のオプションは、空名を含む発話が包括的にメタ表示的思想を表現するとみなす解釈である。このオプションでは、主体の表示は、何らかの対象にかかわるのではなく、他の主体の表示にかかわるとみなされる (*ibid.*)。このオプションは、本節冒頭のルヴェリエのケースに適合する。あるひとが「ルヴェリエはバルカンの発見によって有名になるだろうと考えた」と発話するとしよう。このとき、話者は次のようなファイルを所有している。

〈〈バルカン〉, 〈バルカン, ルヴェリエ〉〉

〈バルカン〉は話者の通常ファイルであり、話者が所有するバルカンについての情報を格納するファイルである。〈バルカン, ルヴェリエ〉はルヴェリエがバルカンについてどのように考えたかにかかわる指標付きファイルである。このケースでは、通常ファイルと指標付きファイルはリンクされない。そのひとは空名の指示対象にコミットしているのではなく、ルヴェリエの表示にかかわっている。つまり、話者自身は発話によって思想を表現しているのではなく、ルヴェリエにかかわる三人称的思想を表現している。他方、この話者が、「バルカンは存在しない」と述べる場合、通常ファイル〈バルカン〉を使用する。通常ファイルの中には、話者が所有する惑星バルカンについての情報が格納されているため、話者は存在否定言明を発話することができる。

3.2 虚構的談話とメタ表示

このように、レカナティは通常ファイルと指標付きファイルというふたつのタイプのファイルの機能の違いによって、主体の言語使用と他者をシミュレーションする能力を説明する。このファイルを作成する心的能力 (ファイル化システム) とメタ表示機能を担う指標付きファイルによって、レカナティは空名の使用を説明する。

このような説明の方針は、虚構的談話の説明に応用することができる。これを検討するため

に、Pautz (2008) からの例を考えてみよう¹²。キャサリンとブリジットの二人がシャーロック・ホームズについて話をしている。キャサリンとブリジットの両者はコナン・ドイルの小説を読んで、ホームズについて知っている。しかし、キャサリンはホームズについての正しい情報（たとえば「探偵である」など）を記憶しているが、ブリジットは記憶違いをして、ホームズが「医者である」などの間違っただ情報に記憶している。

心的ファイル・フレームワークでは、キャサリンとブリジットの例は次のように説明することができる。キャサリンはコナン・ドイルの小説を読んで、〈シャーロック・ホームズ〉ファイルを作成し、正しい情報を格納している。他方、ブリジットはコナン・ドイルの小説を読んで〈シャーロック・ホームズ〉ファイルを作成しているが、記憶違いや他の小説と混同しているために、誤情報を格納している。これは以下のように図式化することができる（「SH」はシャーロック・ホームズの略記とする）。

キャサリン 〈SH [探偵である, ……]〉

ブリジット 〈SH [医者である, ……]〉

ブリジットとキャサリンが空名「シャーロック・ホームズ」を使用し、コナン・ドイルの小説の登場人物について語り合っている場合、指標付きファイルの機能によって両者はお互いの空名の使用を理解し合う。

キャサリン 〈SH [探偵である, ……]〉, 〈SH, ブリジット〉

ブリジット 〈SH [医者である, ……]〉, 〈SH, キャサリン〉

このケースでは、談話の参加者（キャサリンとブリジット）が〈シャーロック・ホームズ〉ファイルという心的ファイルを作成し、保持していることが空名を用いたコミュニケーション理解の鍵となる。そのうえで、指標付きファイルの機能によって、相手がどのように当該の対象（シャーロック・ホームズ）について考えているのかをシミュレートすることができる。たとえば、ブリジットが「ホームズって医者だよな？」と発話したとしよう。このとき、キャサリンは指標付きファイルに「医者である」という情報を格納し、ブリジットがホームズは医者であると考えている、ということを理解する。そして、次のようにファイルをリンクすることによって、「ホームズは探偵だよ」と発話し、ブリジットの発話を訂正することができる。

¹² Pautz (2008) の議論の眼目は、以下の例を通じて虚構的存在者を要請しなければ、指示を説明できないと主張し、マイノリティ主義を擁護することにある。Pautz (2008) の議論の検討については、成瀬 (2014)、第4章を参照。

キャサリン 〈SH [探偵である, ……]〉
 —^{リンク}〈SH [医者である], ブリジット〉

このリンク化により、キャサリンは通常ファイル〈シャーロック・ホームズ〉に格納されている情報（「探偵である」）を、指標付きファイル〈シャーロック・ホームズ, ブリジット〉にフォローすることが許される。したがって、キャサリンはブリジットに「ホームズは探偵だよ」と述べ、ブリジットの信念やシャーロック・ホームズについての情報を訂正することができる。ブリジットもまた、キャサリンの発話を承認した場合、次のように通常ファイルと指標付きファイルをリンクすることによって、シャーロック・ホームズについての情報を訂正することができる。

ブリジット 〈SH [医者である, 探偵である, ……]〉
 —^{リンク}〈SH [探偵である], キャサリン〉

ブリジットは、指標付きファイルに「キャサリンは、シャーロック・ホームズは探偵であると考えている」という情報を格納する。そして、ブリジットがこの情報を承認した場合、指標付きファイルと通常ファイルをリンクさせ、〈シャーロック・ホームズ〉ファイルに「探偵である」という情報を格納し、「医者である」という情報を消去する。

このように、レカナティの心的ファイル・フレームワークは、空名の指示という意味論的な問題設定を、心的作用（ファイル化システム）と指標付きファイルのメタ表示機能による主体間の相互理解という語用論的談話の問題設定に置き換えて説明する。この点において、レカナティの理論は、空名を用いたコミュニケーションの場面を説明する有望な理論とみなすことができるだろう。

むすびに

ここまでは、レカナティの心的ファイル・フレームワークにおける空名の使用とメタ表示の関係を検討してきた。レカナティの理論は、狭義の言語使用のみならず、対象との接触までさかのぼって人間のコミュニケーションを説明する広い視座をもっている。そして、心的ファイル・フレームワークでは、ファイルの獲得と情報の蓄積、情報の統合や分離などの働きを主体の心的機能（ファイル化システム）によって説明されるが、自己反省や空名の志向的使用を説明するためには、通常のファイルとは異なる派生的機能をもつ指標付きファイルが導入される。この指標付きファイルの機能によって、人間のメタ表示機能が説明される。

このように、レカナティの理論では、指標付きファイルとメタ表示は、「ことばをことばで

表す」(東森)だけではなく、言語使用の重要な部分を説明する鍵となる概念である。しかし、レカナティの理論は、ある問題を含んでいると思われる。すなわち、ある主体が空名のファイルを作成し、情報の蓄積がなされたとしても、その空名がなにを指示するのかは説明することができない。いわば、空名の指示は心の内側で自己充足しており、心の外側のいわば虚構世界における対象を指示することには失敗するのである。つまり、キャサリンとブリジットがシャーロック・ホームズ・ファイルを所有し、空名「シャーロック・ホームズ」の使用を理解しあったとしても、その空名がなにを指示するのかは、レカナティのフレームワーク内では説明することはできない。レカナティでは、空名に関して主体が獲得した情報は心的ファイルに格納され、心理化されるために、社会的事実とうたえて空名の指示を確定する方針は残されていない。つまり、レカナティの理論では、空名のファイルの作成および情報の蓄積と、空名の指示のあいだに説明のギャップがあり、レカナティの道具立てだけではそのギャップを埋めることができないのである。

この問題を解決する方針がないわけではない。ひとつの方針は、社会的なネットワークの存在を想定し、空名を使用する場合にはそのネットワークへ参与すると考えることである。このようなネットワークは、「準拠枠 (reference frame)」として機能する。成瀬 (2014) では Perry (2012) をもとに、レカナティの心理化されたフレーゲ主義に対して、フレーゲ的意義を社会化する方針を主張した。この方針では、話者が指示を行う場合には、社会的に形成されたネットワークに参与し、これを参照して指示を行っている。たとえば、指揮者のムラヴィンスキーのような没後の人物について語る場合、話者自身はムラヴィンスキーについて見知っていないとしても、音楽家や音楽評論家のようにその名前を伝える人物の誰かは彼を見知っている。話者はムラヴィンスキーを伝える人物の語りと自身の語りを接続し、ネットワークを形成することによってムラヴィンスキーについて語ることの保証とする。つまり、直接的にある対象を見知っていないとしても、それを見知っている人物の語りを經由して、当該の対象について語るができるのである。

このような社会的なネットワークを参照するモデルがレカナティに残されていないわけではない。レカナティはファイルを獲得する際の ER 関係を、直接的な知覚の見知りだけではなく、他者からの伝達のような媒介された間接的見知りも含めて定式化している。拡張された見知りという ER 関係は、社会的に開かれた可能性をもっており、その意味では社会性・公共性をもつ。しかし、ER 関係はどのような情報が正しいのか見定めるような規範性を有していない。レカナティは虚構のキャラクターなどもファイルを獲得し、情報を蓄積できると主張するが、このような虚構にかかわるファイルを獲得する場合、現実の対象にかかわるファイルを獲得するのと平行な関係を維持することはできない。その理由として、虚構にかかわる場合、規範性を有していないと情報の正しさを検証することができず、誤った情報と正しい情報を区別することができないことが挙げられる。レカナティは、誤情報を許容する柔軟な方針を採用す

るが、虚構のケースでは、実在の対象を参照して情報を検証することができないのである。

一方、社会的に保持された言説を参照するモデルでは、話者が虚構にかかわる場合、ドネランある種の認識的切断ないしブロックが生じると説明される (Donnellan 1974)。つまり、サンタクロースやペガサスについて語る場合、その名前の使用の歴史をさかのぼっていったとしても対象を特定することができず、使用の歴史が途絶える。つまり、いかなる人物のサンタクロースやペガサスを見知っていないため、その語りの歴史というネットワークに参加したとしても、見知りを受け継ぐことはできないのである。しかし、話者は語りの歴史を参照することによって、それがどのようなものであるかを知り、ある種の信念を抱くことができる。その知識や信念は、語りの歴史というネットワークのレベルで保持されているものであり、現実の事物に対する信念とは異なるものである。

レカナティの心的ファイル・フレームワークは、談話の理解やコミュニケーションの成立を説明するには、有益な理論と評価できる。しかし、虚構を語り、空名を使用する場面では、ファイル化システムとメタ表示というレカナティの概念装置だけではうまく説明することができない。その理由は、レカナティが主体の心的作用と認知メカニズムに焦点を当てた心理化されたフレーゲ主義を採用することにあるというのが本論文の結論である。これを回避するためには、社会的に保持された言説を参照し、指示を決定する社会化されたフレーゲ主義を採用する必要がある。しかし、レカナティのメタ表示と談話理解の理論を社会化されたフレーゲ主義を組み合わせることによって、レカナティの心的ファイル・フレームワークを擁護することが残されていないわけではない。この方針を検討することは、本論文の目的を逸脱するために、機会を譲らなければならないが、メタ表示概念を組み込んだ言語哲学的理論の構築は、今後の課題と言えるだろう。

参考文献

- Beyer, B. (2008) Noematic Sinn, F. Mattens (ed.) *Meaning and Language: Phenomenological Perspectives Phaenomenologica* Vol. 187, pp. 75-88.
- Donnellan, K. S. (1974) Speaking of Nothing, *The Philosophical Review* Vol. 83, No. 1, pp. 3-31.
- Evans, G. (1982) *The Varieties of Reference* (edited by J. McDowell). Oxford: Clarendon Press.
- Fine, K. (2007) *Semantic Relationism*. Oxford: Blackwell.
- Frege, G. (1892) Über Sinn und Bedeutung, in Frege (1967) (邦訳「意義と意味について」野本和幸訳、『言語哲学重要論文集』松坂陽一編、勁草書房、2013年)
- . (1897) Logik II, in Frege (1969) (邦訳「論理学Ⅱ」関口浩喜、大辻正晴訳、『フレーゲ著作集第4巻』野本和幸編、勁草書房、1999年)
- . (1967) *Kleine Schriften*, I. Angelelli (hrsg.), Hildesheim, Olms.
- . (1969) *Nachgelassene Schriften*, hrsg. H. Hermes, F. Kambartel, und F. Kaulbachl. Hamburg.
- Hawthorne, J. & Manley, D. (2012) *The Reference Book*. Oxford: Clarendon Press.
- Jeshion, R. (2010) Singular Thought: Acquaintance, Semantic Instrumentalism, and Cognitivism. R. Jeshion

- (ed.) *New Essays on Singular Thought*, pp. 105–140. Oxford: Clarendon Press.
- Kripke, S. (1980) *Naming and Necessity*. Oxford: Blackwell. (邦訳『名指しと必然性——様相の形而上学と心身問題』八木沢敬、野家啓一訳、産業図書、1985年)
- Lewis, D. (1978) Truth in Fiction, *American Philosophical Quarterly* vol. 15-1, pp. 37–46.
- . (1999) *Papers in Metaphysics and Epistemology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsui, T. (2010) Metarepresentation, C. Louise (ed.) *The Pragmatics Encyclopedia*, pp. 268–270, Routledge.
- Millikan, R. (1997) Images of Identity. *Mind* vol. 106, pp. 499–519.
- . (2000) *On Clear and Confused Ideas*. Cambridge U.P.
- Pautz, A. B. (2008) Fictional coreference as a problem for the pretense theory, *Philosophical Studies* vol. 141-2, pp. 147–156.
- Perry, J. (2001 1st ed./2012 2nd ed.) *Reference and Reflexivity*. Stanford: CSLI Publications.
- Priest, G. (2005) *Towards Non-Being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*, Oxford, U.P. (邦訳『存在しないものに向かって——志向性の論理と形而上学』久木田水生、藤川直也訳、勁草書房、2011年)
- Recanati, F. (1993) *Direct Reference: From Language to Thought*. Oxford: Blackwell.
- . (1998) Talk about Fiction. *Lingua e Stile* vol. 33, pp. 547–558.
- . (2012) *Mental Files*. Oxford: Clarendon Press.
- Sperber, Dan (ed.) (2000) *Metarepresentations: An Interdisciplinary Perspective*. Oxford U.P.
- Wilson, D. (2000) Metarepresentation in Linguistic Communication. D. Sperber (ed.) 2000, pp. 411–448.
- Zalta, E. N. (1983) *Abstract Objects: An Introduction to Axiomatic Metaphysics*. Springer.
- 酒井智宏 (2012) 『トートロジーの意味を構築する——「意味」のない日常言語の意味論』くろしお出版
- 中島信夫 (2013) 「メタ表示とはどういうものか」『甲南大学紀要文学部編』163、pp. 91–100.
- 成瀬翔 (2014) 「空名の指示の理論と現代フレーゲ主義の可能性」(博士論文：名古屋大学)
- (2015) 「心的ファイルとノエマ」『フッサール研究』第11号、pp. 1–15.
- 東森勲(編) (2015) 『メタ表示と語用論』開拓社

キーワード：メタ表示、語用論、空名、フランソワ・レカナティ

Abstract

Mental File and Meta-representation

Sho NARUSE

The concept of meta-representation attracts attention in field of linguistics and cognitive science. Deirdre Wilson defines as follows: “A metarepresentation is a representation of a representation: a higher-order representation with a lower-order representation embedded within it.” (Wilson 2000, p. 411) Meta-representational capability is the mental domain has been investigated systematically in theory of mind research. Meta-representational capability is essential in communication.

In philosophy, meta-representation is not only investigated in theory of mind research, but also communication research. Especially, François Recanati argues that meta-representation is key concept of intentional use of empty names (Recanati 2012). According to Recanati, intentional use of empty names can be explained by meta-representational capability. I will examine Recanati’s theory, and show his’ theory has some problems.

The contents of this paper are as follows. In Section 1, I will survey research of meta-representation in linguistics and cognitive science. In Section 2, I will introduce Recanati’s mental file-framework. In Section 3, I will examine Recanati’s theory of intentional use of empty names and meta-representation. Finally, I criticize Recanati’s theory, and present more modest-theory.

Keywords: meta-representation, pragmatics, empty name, François Recanati